

小中学校教員と教職課程の大学生における SNS リスクと情報モラル教育への意識の差

酒井郷平*1・高瀬和也*2

Email: k-sakai@sz.tokoha-u.ac.jp

*1: 常葉大学教育学部

*2: 鹿児島大学大学院教育学研究科

◎Key Words 情報モラル教育, 教員養成, ICT 教育, SNS のリスク

1. はじめに

近年、学校現場ではスマートフォン利用の低年齢化や GIGA スクール構想の実施に伴い、情報モラル教育の重要性が高まっている。小学校や中学校においては、特別の教科道徳や総合的な学習の時間を中心としながら、教科指導、生徒指導など学校全体の教育活動を通じて、情報モラルの横断的な指導が行われている^①。

では、情報モラル教育に関する「指導観」は、どのような要因によって形成されるのだろうか。指導観の形成要因について、情報モラル教育に特化した研究は少ないが、教育全般においては「自身の経験」が指導観に影響を及ぼすことが報告されている^②。また、高校生においてオンラインの非同期型授業の経験が豊富なほど、情報モラルに関して慎重な行動をとる傾向があることが示されている^③。これらの知見から、情報モラル教育における指導観も、教員自身の経験や、そこから涵養された情報モラルによって形成される可能性が考えられる。

さらに、デジタルネイティブ世代の大学生について、情報モラルの理解は進んでいる一方で、インターネットリスクへの対処能力が低下している可能性が指摘されている^④。2010 年以降のスマートフォン普及を踏まえると、現在の教職課程に所属する大学生にも同様の傾向が見られる可能性がある。換言すれば、現職教員と教職課程の大学生の間で、インターネットリスクへの認識や情報モラル教育への意識に差異が存在している可能性がある。

このような差異を明らかにすることは、今後の情報モラル教育における指導観の在り方や、教員養成課程の大学生への指導法的设计、さらには教員養成における教育課題の抽出においても有意義であると考えられる。また、昨今では学校教員による SNS や情報セキュリティに関する不祥事も報告されており、幅広い世代が従事する学校教員というコミュニティの中で将来的に生じる情報モラルに対する感覚の差を明らかにできる。これまでも、現職教員や大学生を対象とした情報モラルに関する意識調査は行われている^{⑤⑥⑦⑧}。しかし、両者を SNS リスクや情報モラル教育の意識の点からの比較した研究成果は見られない。

そこで本研究では、現職教員および教職課程の大学生を対象に、SNS に対するリスク認識および情報モラル教育に関する意識の現状を把握し、その差異を検証することを目的とする。なお、リスクの中でも SNS に着目する理由は、SNS が時代的に特徴的であり、世代間の意識差をより明確に捉えられると判断したためである。

2. 研究の方法

2.1 調査対象者

国立 X 小学校 35 名と Y 中学校 30 名の教員 65 名、および A 大学、B 大学、C 大学の教職課程を履修する大学 3 年生 210 名 (A 大学 75 名、B 大学 93 名、C 大学 35 名) を対象としたオンライン調査を実施した。調査の実施にあたっては、調査の目的と調査結果の利用方法について説明し、同意を得られた場合のみ無記名で回答するものとした。調査期間は、2023 年 12 月～2024 年 2 月とし、その期間に回答があった教員 33 名と大学生 203 名を分析対象とした。なお、回答者の平均年齢は教員 38.2 歳、大学生 20.8 歳であった。

2.2 調査項目

本研究の目的を達成するため、調査項目は以下の 3 つの項目から構成した。

1) SNS 利用に関する経験

SNS を介して出会うきっかけとなった人数を問うため、「SNS 上で知り合った人とメッセージのやり取りをしたことはありますか?」、「SNS 上で知り合った人と顔写真を交換したことはありますか?」、「SNS 上で知り合った人と直接会ったことはありますか?」、「SNS 上で知り合った人と交際したことはありますか?」のそれぞれの質問に対して、「何人もある」「数人程度ある」「1 人だけある」「全くない」のいずれかを選択する方法で回答を求めた。

2) 情報モラルの学習経験

これまでに情報モラル教育を受けた経験を問うため、「ご自身は、今までに「学習者の立場」で情報モラル教育を受けた経験はありますか?」の質問に対して、「ある」「ない」「わからない」のいずれかを選択する方法で回答を求めた。

3) 情報モラル教育に対する意識

学校現場での情報モラル教育に関しての意識を問うため、「ご自身は情報モラル教育の指導方法について具体的に理解していると思いますか?」、「ご自身は情報モラル教育の指導方法についてもっと理解を深めたいと思いますか?」、「ご自身は現時点で情報モラルを学校で適切に指導できると思いますか?」、「ご自身は学校教員がプライベートアカウントで SNS を使用することを制限すべきだと思いますか?」、「実際に起きた SNS に関する学校教員の不祥事を知ること、ご自身の SNS の使い方に変化が起きると思いますか?」のそれぞれの質問に対して、5

件法 (1. 全くそう思わない～5. とてもそう思う) により回答を求めた。

3. 調査結果

3.1 SNS 利用における経験の差異

教員と教職課程の大学生の SNS 利用における経験の差異の比較を行った。分析の方法として、回答時の選択肢が順序尺度であるため、「全くない」～「何人 (回) もある」に 1～4 点を与え、Mann-Whitney の U 検定を施した (表 1)。その結果、SNS 上で知り合った人とのやりとり経験 ($z=4.49, p<.001, r=0.30$)、顔写真の交換経験 ($z=2.39, p<.05, r=0.16$)、直接会った経験 ($z=2.92, p<.01, r=0.19$) において有意差が認められた。経験率から、現職教員と比較して教職課程の大学生の経験率が高いことが示されており、SNS を介した他者との出会いに対して、リスクの認識が低い可能性が考えられる。この結果から、現在は学校で情報モラル教育に取り組んでいる教員は SNS を介した他者との出会いの経験が無い教員が多く指導にあたっているが、これから徐々にこうした経験を持つ教員も増加傾向になることが予想され、情報モラル教育の指導観に何らかの影響を及ぼすことは否定できない。先行研究により、1 人 1 台端末の利用に関する教員のルールづくりについて、教員自身の ICT 活用度が高いほど利用を制限するルールを設定しない傾向があることを指摘している⁹⁾が、こうした傾向にも今後は変化が生じる可能性がある。

表 1 SNS 利用における経験の差

		全くない	一人度だけ	数人回程度	何人(回)も	経験率	<i>z</i>
やりとり	学生	65	4	77	57	68.0%	4.49***
	教員	24	0	8	1	27.3%	
写真交換	学生	159	8	30	6	21.7%	2.43*
	教員	32	0	0	1	3.0%	
直接	学生	132	11	50	10	35.0%	2.92**
	教員	30	0	3	0	9.1%	
交際	学生	182	15	6	0	10.3%	1.35, n.s.
	教員	32	1	0	0	3.0%	

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

3.2 情報モラルの学習経験の差異

教員と教職課程の大学生との間で情報モラルを学習した経験の差異を明らかにするため、得られた回答に対して Fisher の直接確率検定を行った (表 2)。その結果、有意差が認められたため ($p<.001$)、教員に対して教職課程

の大学生は学習経験率が高いことが示された。この結果は、年代による影響が大きいものと考えられる。学校現場で情報モラル教育が積極的に取り組まれるようになったのは、平成 20 年 3 月に告示された学習指導要領の影響が大きく、それ以前は学校の裁量による部分も大きかった。現在の大学生の世代では、義務教育段階や高等学校で情報モラル教育に触れる機会が多いことを反映した結果といえるだろう。

他方、教員についても学校現場での情報モラル教育のニーズが高まっており、教員研修会等で情報モラルについて学習していることから、比較的未経験者数が少なかったと予想される。今後は、情報モラル教育の学習経験を持った教員の割合が増加していくことが考えられる。

表 2 情報モラルの学習経験の差

	未経験	経験	経験率
学生	5	179	97.3%
教員	7	20	74.1%

3.3 情報モラル教育に対する意識の差

情報モラル教育に対する意識の差異を明らかにするため、教員と教職課程の大学生の回答に対して、Student の *t* 検定を行った (表 3)。その結果、情報モラルの理解度 ($t=2.79, p<.01, d=0.52$)、情報モラルを指導する自信 ($t=4.42, p<.001, d=0.83$)、学校教員の不祥事を知ることで SNS の使い方に変化 ($t=2.10, p<.05, d=0.39$) において有意に教員の平均値が高い結果となった。また、情報モラル教育に対する理解意欲 ($t=1.84, p<.10, d=0.34$) は有意な傾向がみられ、教員のプライベートアカウントの利用制限 ($t=0.36, n.s., d=0.07$) については、有意差は認められなかった。

以上の結果から、全体的な情報モラル教育への意識は教員の方が高い傾向が窺える。大学生までに情報モラル教育について学習するものの、その必要性の実感や指導の自信については、学校現場で実際に教員として働くことで醸成される部分が多いことが示唆される。

表 3 情報モラル教育に対する意識の差

		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>	<i>d</i>
理解度	学生	3.23	1.09	2.79**	0.52
	教員	3.79	0.93		
理解意欲	学生	4.37	0.79	1.84†	0.34
	教員	4.64	0.49		
指導自信	学生	2.86	1.14	4.42***	0.83
	教員	3.79	0.93		
SNS 制限	学生	2.37	1.23	0.36	0.07
	教員	2.45	1.42		
使用変化	学生	3.76	1.07	2.10*	0.39
	教員	4.18	1.07		

† $p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$, *d*: Cohen's

4. 今後の情報モラル教育に向けた考察

分析の結果から、教員と教職課程の大学生における意識の差異について明らかとなった。これらをふまえ、今後の情報モラル教育に向けて得られた示唆について 3 点考察する。

1 点目は、教職課程の大学生に対する情報モラル教育の

効果についてである。情報モラルの学習経験の差から現職の教員よりも現在の大学生は情報モラルの学習経験率が高いことが明らかとなったが、その一方で、SNS 利用によって他者とつながる行動も多くなっていることが示された。この背景として、スマートフォンをはじめとする情報端末の利用が身近であることとともに、情報モラル教育の課題も考えられる。本調査の対象とした大学生は、情報モラル教育を受けてきているものの、その教育の効果として実際にリスクのある行動を抑制する効果を与えていない可能性である。GIGA スクール構想が組み込まれているように、これからの情報社会を見据え、高校や大学においても情報活用能力の育成を目指した授業や教育が行われている。こうした中で、情報活用とリスク回避の両面を考慮しながら、情報機器を使用していくことが必要であり、「SNS を使わない」、「SNS で知り合った人と出会わない」という規制のみに終始する指導だけでは、教育効果が期待できない可能性がある。

2 点目は、学校現場での指導経験と情報モラル教育の理解の意欲や指導の自信についてである。本調査から、情報モラル教育の学習経験率が高い大学生に比べ、現職教員の方が情報モラルの理解度や理解意欲、指導の自信に関する意識が高いという結果がみられた。このことは、自身の情報モラルの学習経験よりも学校現場で情報モラル教育の大切さを実感することや実際に指導を行うことで情報モラルに対する意識が向上することが考えられる。換言すれば、教職課程の大学生に対しても、学校現場で情報モラル教育について触れるきっかけを作ることが、情報モラル教育への意欲や理解につながる可能性がある。

他方、この結果からは情報モラル教育の指導の自信と実際に適切な指導が行われているかという実態の関係性を読み取ることはできない。つまり、学校現場で子どもたちに情報モラルを指導していく中で、自分は情報モラルの指導が上手く行えているという過度な自信を持たせている可能性も否定できない。今後は、こうした点についても明らかにしていく必要があるだろう。

3 点目は、現職の教員を対象とした情報モラル教育に関する教員研修の前提についてである。本調査から明らかとなったように現職の教員と現在の教職課程の大学生には、SNS へのリスク認識や情報モラル教育に対する意識に差異が生じている部分があることが明らかとなった。今後、年数を経るにつれて本調査の大学生の意識に近い教員が増加していくことが見込まれる。これにより、学校現場でも SNS 利用や情報モラル教育に対して世代間の差異を持った教員が混在することを前提とした教員研修の内容を検討していく必要がある。また、GIGA スクール構想の開始に伴い、さらに下の世代では現在の大学生とも異なる意識を持つ可能性がある。近年の教員の SNS に関連した不祥事やトラブルの発生状況を考慮しても、従来の教員研修の方法だけではなく、SNS 利用に対するリスク認識が低い世代に対応した教員研修のあり方も検討する必要があるだろう。

5. おわりに

本研究では、現職教員と教職課程の大学生を対象として、SNS へのリスク認識と情報モラル教育に関する現状の意識を明らかにし、その差異について検証することを

目的とした調査を実施した。その結果、現在の教員と教職課程の大学生において意識の差異から、今後の情報モラル教育や教員研修会の在り方について示唆が得られた。

他方、研究の限界として、本研究では SNS 利用に関する他者との出会いに特化した質問項目を設定したため、限定的なリスクに関する差異しか明らかにできていない。インターネットサービスや情報機器の機能の増加により、情報モラルに関連したトラブルが多様化している傾向を考慮すれば、今後は幅広いトラブルに関して大学生世代と現職教員のリスク認識の差異について明らかにする必要があるだろう。今後は、こうしたより広い情報モラルの内容と調査範囲を設定した上で研究を実施していく予定である。

参考文献

- (1) 竹口幸志：“情報活用能力の育成における情報モラルの位置づけとその課題”，鳴門教育大学学校教育研究紀要, 36, pp.163-171 (2022).
- (2) 小沼豊, 市川洋子, 高橋知己, 藤原則之：“特別活動の学習経験が自身の指導観に与える影響”，教師学研究, 19, pp.35-42 (2016).
- (3) 齋藤陽花, 金松萌々花, 南條優, 下崎高, 小泉遥香ほか：“高校でのオンライン授業の経験による教員養成学部生の ICT 活用指導力に関する実態調査”，日本教育工学会研究報告集, 2022, 2, pp.96-101 (2022).
- (4) 高橋俊史：“デジタルネイティブ世代と呼ばれる大学生を対象とした情報モラル教育に関する一考察”，東北福祉大学紀要, 44, pp.79-96 (2020).
- (5) 相澤崇：“教員の情報モラルの指導に関する意識—指導経験の有無による比較・分析を中心に—”，教育情報研究, 26, 2, pp.3-13 (2010).
- (6) 山本利一, 勝木仙太, 本村猛能, 本郷健：“情報モラル教育に関する国の動向と教員の意識調査”，埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 16, pp.1-8 (2017).
- (7) 佐久未佳, 西正明：“長野県中学校技術科教員の情報モラル教育実態調査”，信州大学教育学部附属次世代型学び研究開発センター紀要『教育実践研究』, 16, pp.207-216 (2017).
- (8) 安里基子, 佐藤和紀, 高橋純：“教員養成課程の学生に情報モラル指導法に関する指導を行う際の留意点の検討”，教育メディア研究, 26, 1, pp.21-30 (2019).
- (9) 酒井郷平, 田中奈津子, 高瀬和也, 中村美智太郎：“学級の「1人1台端末」環境における教員のルールづくりの傾向と要因の分析”，コンピュータ&エデュケーション, 53, pp.52-57 (2022).